

語用論と臨界期（2） 身内を語る時：異なるダイアレクトにおいて

川手-ミヤジェイエフスカ 恩
テンプル大学ジャパンキャンパス
聖学院大学[非]¹

1. はじめに

本稿では、昨年度のハンガリーでの会議発表(Kawate-Mierzejewska, 2008)を更に進展させ、『身内を語る時』と言う状況における東日本と西日本における語用論的方略の違いを基に、年齢という要因が語用論習得においてどのような影響を与えるのかという考察を試みる。語用論とは、円滑なコミュニケーションを図るため、状況や話し相手との関係を考慮して実際の社会の中でどのように言語を使っていくかということの研究する学問である(Kawate-Mierzejewska, 2002; 2008)。

そこで、まず語用論習得時期はいつなのかということをもう一度、簡単に見ておく。バイリンガルの小学生にはすでに社会言語的能力が発達しているというWalters(1981)の研究や、子供は8歳くらいから語用論的能力が備わっているというErvin-TrippとGordon(1986)の共同研究やGordonとBudwigとStrageそしてCarrell(1980)の共同研究、そして小学校3から5年生までにはかなり高度な語用論的能力が身につくというLiebling(1988)の研究結果報告から考えれば、母語における語用論的能力は、小学生になってからの第一言語発達の過程において発達するようだ。つまり、臨界期と呼ばれる言語習得に努力を要する時期が来る前ということになる。

以下、まず、本稿の研究調査の要となる『臨界期と言語習得』『関東と関西の違い』『褒め言葉』をみておく。

2. 先行研究

2-1 臨界期と言語習得

本セクションでは、『臨界期仮説と言語習得』『臨界期と異なるダイアレクトの習得』に焦点を当てておく。

2-1-1 臨界期仮説と言語習得

脳科学の先行研究によれば、人間の脳機能は年齢とともに低下してくるという。それは、物事を処理する速度(Schaie, 1989)であったり、感覚機能であったり(Lindenberger, Scherer, & Baltes, 2001)、脳の容積(Raz et al., 2005)に関係する問題であったりする。例えば、年齢と共に脳機能も低下するという認知的加齢影響処理速度理論(*The influential processing speed theory of cognitive aging*) (Salthouse, Hancock, Meinz, & Hambrick, 1996)では、脳機能の低下は、脳の大きさ(Tisserand, Bosma, Van Boxtel, & Jolles, 2001)や前頭葉前部の容積(Raz, Briggs, Marks, & Acker, 1999)や脳内白

質(Madden, Whiting, Provenzale, & Huettel, 2004)に左右される意思決定速度(Cerella, 1990; Salthouse, 1991)によって説明できると考えられている。つまり、年齢に伴い脳機能が低下し、それに伴い意思決定速度も落ちてくると考えられるようだ。

そこで、脳機能を考えた時、一つの大きな節目となるのが『臨界期』の存在であるにちがいない。『臨界期』というのは、人類が人生の初期に迎える外部からの刺激に対する感受性が最も高まる一時的な期間である(Birdsong, 2005; Hyltenstam & Abrahamsson, 2003; Montrul, 2008)。つまり、『臨界期』には、始まりと終わりがあり(Colombo, 1982)、この時期に子供は様々なことを学ぶわけだ。そして、2007年のハンガリーでの会議(Kawate-Mierzejewska, 2008)でも言及したように、『臨界期』は言語習得にも影響を及ぼすようだ。

言語習得における『臨界期仮説』(*The critical period hypothesis*)によれば、「人間は努力をせずに言語を習得できる時期があるという。Penfield&Roberts (1959)は、人間は脳が可塑性(*plasticity*)を持っている10歳までは努力なしで言語習得ができるといった。彼らによれば、左脳における脳の言語習得領域の側性化(*lateralization*)が強まるために、可塑性(*plasticity*)は思春期(*puberty*)が始まるとなくなってしまい、その結果、言語習得は思春期を過ぎると努力なしで自然にできるものではなくなってしまふという(Kawate-Mierzejewska, 2008, p.89)」。Pinker(1994)は、どんな言語でも6歳までなら習得は保証されるがそれを過ぎると思春期に入り始める頃までに徐々に習得が危うくなっていくという。また、Chomsky (1959)やNewport (1990)によれば、若い子供たちは、言語習得が容易にできる傾向にあるという。Newport (1990)は、思春期が始まると言語習得を妨げる認知過程が発達してくるため言語習得が困難になるという。例えば、学習内容や教師が嫌いであることが、言語習得の妨げとなる可能性も出てくる。Lenneberg (1967)やBasser(1962)は、幼児期の失語症において片側性障害を持つ子供の言語機能の回復、つまり左脳機能の回復は、同じ障害を持つ大人より早いという事実に基づいて臨界期仮説を支持した。彼らの研究は障害から回復するという過程に焦点を当てたもので臨界期仮説を支持する間接的な証拠となるにちがいない。

次に、障害のない脳と臨界期仮説に関しての先行研究を見ておく。Mayberry & Eichen (1991)は、障害のない両親を持つ聴覚障害のある幼児期のアメリカ手話学習者と青年期の前半である思春期(13歳)に達したアメリカ手話学習者との手話習得における年齢の影響を研究し、幼児期の手話学習者は思春期に達した学習者より、特に複雑な表現に関する手話習得率が高いという結果を得ている。彼らはその結果に基づき、幼少時代は言語習得を容易にするという結論を出し、臨界期仮説を支持している。Grimshaw, Adelstein, Bryden, & MacKinnon(1998)は、ワーデンブルグ症候群²のために生まれた時から耳が聞こえなかった少年が、15歳で両耳補聴器により聴力を矯正され会話が聞き取れるようになった時から、4年間にわたってその少年の言語習得の過程を観察した。その結果、少年は聞こえるにもかかわらず、言語理解や話すことが困難であることがわかり、彼らの研究からも、臨界期仮説を支持する結果が

でた (Grimshaw et al.,1998)。また、幼児期に父親に虐待、そして監禁され1歳8か月から13歳まで誰とも話をすることのなかった Genie という少女が、発見されてから言語学習を試みたが、習得は困難であったという事実 (Curtiss, 1977) も、もちろん彼女のケースは幼児期に虐待を受けているという特殊なものなので、型に当てはまらないものではあったようだが、多少なりと臨界期仮説を支持している。

2-1-2 臨界期と異なるダイアレクトの習得

本稿では dialects を『方言』とは訳さずに、どの地方の言葉も同じように価値のあるもので、ただ語彙や発音、文法が異なるものであるという意味で、あえてそのままカタカナで、ダイアレクトと表記する。

臨界期と異なるダイアレクトの習得に関しては、Kawate-Mierzejewska (2008)でも取り上げたが、結論から言ってしまえば、ダイアレクトの習得においても臨界期仮説を支持できるようだ。以下、簡単にまとめておく。先行研究によれば、母語習得の過程で、思春期を過ぎると母語話者としての発音習得が困難であるという (Labov, 1966; Krashen & Seliger, 1975)。これは、日本語習得においても例外ではないようだ。引っ越しなどにより、思春期を過ぎて使い始めた新しいダイアレクトでは、語彙に対応することは容易であるが、発音に関しては最初に習得したダイアレクトのピッチ・アクセントを使う傾向にあるという (Kaiser, 1995; Kindaichi, 1977)。思春期を迎える前に関西から東京に引っ越してくれば、東京弁のピッチ・アクセントが使えるようになる。しかし、思春期を過ぎてからだと、もちろん、個々の住む環境や新しいダイアレクトのとらえ方によって例外はあるが、多くの場合、東京弁の語彙の習得はできるが、発音に関して言えば最初に習得した関西弁のピッチ・アクセントをそのまま使う傾向にあるようだ(Kawate-Mierzejewska,2004)。

2-2 関東と関西の違い

関西と関東の人たちの発話の方略の相違をアンケートにより調べた Kawate-Mierzejewska(2008)によれば、関東人と関西人は、関東で『すてる』というのを関西では『ほかす』というように使用する言語表現そのものが異なる (Palter & Slotsve, 1995)というばかりでなく、「話し方の態度、方略、表現の単刀直入さ、トピックや非言語的要素(p.97)」に至るまで違うと感じている人が多いという。詳しくは、Kawate-Mierzejewska(2008)を参照されたい。

2-3 褒め言葉

本セクションでは、話し手は、誰を褒めるのかということを中心に考えてみる。Nishihara(1994)によれば、日本社会の持つ『内と外』 (Davies & Ikeno, 2002)という概念を家族に当てはめて考えた時、日本人は家族以外の人間 (外) に身内 (内) について語る時は、謙遜をする傾向にあるという。つまり、聞き手がここで言うところの外グループに属する人間である時は、家族のことを褒めるのではなく謙遜し、その結果、家族

をけなしてしまうような表現を使うことがあるようだ。例えば、母親が息子のことをご近所の友人に語る時、事実とは正反対でも『うちの息子は出来が悪くて。。お宅の優秀なご子息にはとてもかなわなくてよ』と言うような具合に、実際にはとてもできのいい息子でも、けなしてしまうような表現を使って謙遜をするわけである。そしてこれは、親子関係だけに限らず、夫婦間でも言えることのようなのだ。あるビジネスマンが新婚そうそう、同僚を新婚宅に招待した時、『My wife is not beautiful and cannot cook very well (e.g., うちのかみさんは、器量も良くないし料理も上手じゃないんだけど食事に来ない?)』というような誘い方をしたという逸話もある(Sakamoto & Sakamoto, 2004, p.1)。もちろん実際には、その奥さんはとてもきれいでお料理もとても上手だったというのだが。

本題にもどってここで、考えておきたいのは、上記のようなコミュニケーションの方略が、日本列島の西と東で、同じか否かということだ。両者の言葉やピッチ・アクセントが異なるように、この「褒める」という発話行為においても方略が違う可能性もあろう。Kawate-Mierzejewska (2008)によれば、話のトピックという項目において、関西人は自慢をする傾向もあると感じている人もいたようだ。この自慢をするという観点から、前出のビジネスマンのケースを考えてみると『うちのよめはん、料理がごつつう上手いんや。それに、別嬪で器量もええしなあ。そやから、家で一緒に食事でもせーへん?』というような具合になるのかもしれない。そこで、本研究では、このような語用論的能力は第一言語習得・発達過程のいつ頃、身につくのかということを考えてみるため『身内を語る』という状況を作り出した。

3. 本研究の目的と枠組み

本稿では、研究調査項目を確立するために行われた、関東の人たち（東京・神奈川出身者）と関西の人たち（大阪や西日本の人たち）の行動や発話方略（語用論的方略）の違い（Kawate-Mierzejewska, 2008）を考察した予備調査の結果をも踏まえて選んだ、『身内を語る』という状況に焦点をあて、年齢が如何に母語における語用論的能力習得と関係してくるのかということを考えてみる。

具体的には、まず、東日本と西日本の『身内を語る』という状況における発話行為の共通点や相違点を考察する。その結果を踏まえて、西日本で生まれたが、小学校に入る前に東京周辺に引っ越したグループと、子供時代を西日本で過ごし臨界期が終了したと考えられる12～13歳を過ぎてから関東に引っ越したグループの共通点や相違点を吟味し、年齢と語用論習得の関係に関しての分析を試みる。

以上をまとめると、本研究では、臨界期仮説を基に、関東に引っ越してきた時期が異なる二つのグループの発話行為を比較し、臨界期の有無の間接的な証拠の確立を試みている。つまり、小学校に入学する前に引っ越したグループが関東で使われる方略を使い、小学校を卒業してから引っ越してきたグループはそれ以来何年も関東に住んでいるにもかかわらず、なお西日本で使われる方略を使う傾向にあるということがわかれば、それを以って、語用論的能力は中学に上がる前の母語習得・発

達の過程で身についてくるに違いないと想定できる。つまり、生理学的見地からすれば間接的な証拠ではあるが、語用論習得にも臨界期があるのではないかと考えられるわけだ。

そこで、まず前提となる関東と西日本での発話行為を吟味し、それを基に年齢の持つ影響に関して分析する。

4. 研究調査事項

- (1) 関東と西日本での『身内を語る』際の類似点と相違点は何か。
- (2) 小学校に入学する前に関東に引っ越してきた人たちの『身内を語る』際の発話行為は、関東と西日本のどちらに多くみられるものなのか。
- (3) 小学校を卒業してから引っ越してきた人たちの『身内を語る』際の発話行為は、関東と西日本のどちらに多くみられるものなのか。

5. 研究調査方法

5-1 参加者

19歳から30歳までの関東周辺(東京・神奈川・大宮までの東京よりの埼玉)に住む44名と西日本で生まれ育った(近畿・中国・四国³)44名の日本語を母語とする大学生・大学院生たちが本調査に協力してくれた。関東周辺に住む44名中、7名は西日本で生まれ、小学校に入学する前(本研究では、便宜上『思春期を迎える前』という表現と同じ意味で使われている)に関東に移り住んだ学生、もう7名は西日本で生まれ、小学校時代はそこで暮らし小学校を卒業してから(本研究では、便宜上『思春期を迎えてから』と表現と同じ意味で使われている)関東に移り住んだ学生で、2名は帰国子女で小学校から高校まで海外で暮らしていた学生であった。

5-2 研究調査マテリアルとデータ収集過程

データ収集には、5つの異なる発話行為に関する状況を想定した日本語版と英語版の両方から成る談話完成テストが使われた。本研究は、そのうちの一つである、『友人を食事に招待するとき』の発話行為に関しての日本語版に焦点を当てた(資料A参照)。また、この『友人を食事に招待するとき』の状況は前出の Sakamoto & Sakamoto (2004)の逸話を基に作成された。談話完成テストは、参加者自身に関する情報収集のためのアンケート(資料B参照)と、研究調査参加同意書(資料C参照)と共に、授業の後の休み時間などに配布され20分程でやってもらった。まず、情報収集のためのアンケートを配り、それを書いてもらってから日本語版の談話研究テストをやってもらった。それを回収した後で英語版もやってもらい、最後に研究調査参加同意書を渡し回収した。

5-3 収集データ分析方法

参加者88人から、収集されたデータは、発話一つを『いち』と数え、各人が一言

表1 分類の種類とコーディング

	発話
その場にはいない身内をほめる	
外見	とてもきれいです：ハンサムです：別嬪ですよ
人柄	とても優しい人です：とても親しみやすくて... やさしくて親切な人です。
能力	料理がとても上手なので...：料理が得意じゃけえ...
組み合わせ	とっても美しくて料理も得意なんです。
その場にはいない身内に代わって話す（身内のために）	
社交辞令	... お会いできるのを楽しみにしています。
代弁（内意識）	ものすごく会いたがっていますよ；お会いしたいと言いました。
人物紹介	夫は28歳でアメリカの会社に勤めているので...；今は市内で働いとるんです。
聞き手に対しての発言	
希望・前向きな意見	...あなたも気軽に話せると思います：...すぐ気に入ると思うよ：楽しい時間になるよ。
感謝	...ありが ^が とう（。。。。であると考えられる）
家族としての発言	
社交辞令	...それでは金曜日に会うのを楽しみにしています：お待ちしています：お待ちしとります。
意志伝達	...おいしいお料理を作って楽しみに待ってます。
話し手の気持ちを述べる	
のろけ	やっと結婚できました：料理の腕にほれ込んで結婚したようなものだから。
やきもち	おれの女に手をつけないでくれよ。
その場にはいない身内のことを謙遜する	
前向きな謙遜	料理を作るのが好きなので張り切って作るでしょう。
否定的な謙遜	夫は見た目はそんなにかっこよくないんだけど...：夫はちょっと変わっているけど...：料理があまり得意ではないんだ...
どちらとも言えない謙遜	とても恥ずかしがり屋です：とても恥ずかしがり屋なんですけど...：少し恥ずかしがる場所があるので...
話し手による謙遜（希望発言）	
希望発言による謙遜表現	陽気な人なので仲よくしてもらえるとうれしいよ：いい時間になればうれしいです。

から二言、三言と話すようで全体で 188 の発話数となった。分析に際してまず、それらは、話し手と聞き手、そして内容という二つの観点から、『その場にはいない身内を褒める』『その場にはいない身内に代わって話す[代弁]』『聞き手に対しての発言』『家族としての発言』『話し手の気持ちを述べる』『その場にはいない身内のことを謙遜する』『話し手による謙遜[希望発言]』という 7 つの大きなカテゴリーに分けられた (表 1 参照)。

本研究は談話完テストに返答を書き込んでもらうという方法をとったので、書き言葉を収集した形となった。したがって、東と西の語彙や語尾などの相違は、多少はあったが全体的にあまりみられなかった。そこで、分析の対象として、発話行為の内容や方略に焦点を当てた。以下、それぞれのカテゴリーを見ておく。

まず『その場にはいない身内を褒める』というカテゴリーは、何を褒めるかという内容を考慮し、更に『外見』『人柄』『能力』『組み合わせ』という 4 つのカテゴリーに分けられた。表 1 にあるように「きれい」とか「ハンサム」というのは『外見』、「やさしい」とか「親しみやすい」は『人柄』、そして「料理が上手」とか「料理が得意」というのは『能力』で、「美しくて料理も得意」というような発言は『組み合わせ』と考えた。次に『その場にはいない身内に代わって話す[代弁]』という項目に移る。これは、話し手が、身内が言うだろうことを想定して、代弁するもので、英語を使えば “she/he (3 人称単数)” で始まる発話である。発話の内容を基に、『社交辞令』『代弁[内意識]』『人物紹介』というサブ・カテゴリーに分けられた。そして、「...お会いできるのを楽しみにしています」のような定形発話は『社交辞令』、「お会いしたいと言いました」というような発話の代弁は『代弁[内意識]』(ここでいう内意識とは話し手と身内は、うちという最小限の同じグループに属するということである [Davies & Ikeno, 2002])、そして「今は市内で働いとるんです」のような身内の紹介は『人物紹介』という項目にいった。次の『聞き手に対しての発言』(英語を使えば “I” で始まる発話)にもサブ・カテゴリーがあり、『希望・前向きな意見』と『感謝』に分かれる。前者は「...あなたも気軽に話せると思う」や「すぐ気に入ると思う」のような発話で、後者は字のごとく「ありがとう」と感謝を表す発話である。そして『家族としての発言』というものは、話し手の発話はまた身内のものでもあるというもので、英語を使えば “we” にあたるものである。

このカテゴリーは、家族としての『社交辞令』(e.g., ...それでは金曜日に会うのを楽しみにしています)と『意思の伝達』(e.g., ...おいしいお料理を作って楽しみに待っています)から成る。そして更に、『話し手の気持ちを述べる』というカテゴリーも作成し、『のろけ』(e.g., 料理の腕にほれ込んで結婚したようなものだから)とか『やきもち』(e.g., おれの女に手をつけないでくれよ)を拾い集めてみた。

以上見てきたような『褒める』『中立』という立場での発話に加えて、『謙遜』と考えられる発話も見られた (表 1)。まず、『その場にはいない身内のことを謙遜する』ための発話は、「料理を作るのが好きなので張り切って作るでしょう」というような『前向きな謙遜』、「夫は見た目はそんなにかっこよくないんだけど...」とか「妻は料理があ

まり得意ではないんだ…」というような『否定的な謙遜』、そして「とても恥ずかしがり屋なんだけど…」というような『どちらともいえない謙遜』の3つのサブ・カテゴリーに分けられた。最後に『話し手による謙遜[希望発言]』というカテゴリーを設け、「仲良くしてもらえるとうれしい」とか「いい時間になればうれしいです」というような発話を分類した。

以上のように188の発話を2人のコーダーで分類した後(コーダー間の信頼性は90%以上で、意見が合わなかった発話に関しては最終的に話し合いでカテゴリーを決めた)、それぞれのカテゴリーの発話回数を数えて、観測度数(observed frequency)を基に東と西の類似点や相違点を吟味した。更に、その結果を踏まえて、年齢が語用論習得に与える影響を分析した。本研究では、観測度数(observed frequency)を基にはしているが、これといった統計処理は行われなかった。つまり、統計処理の結果を想定した上で質的分析が試みられ、それぞれの調査事項に関する確固たる回答でなく、傾向を見出そうとした。その理由としては、それぞれのカテゴリーにおける発話数が統計処理をするのには少なすぎたことと、各人がそれぞれ一言から二言・三言の発話をしていることから、多くの場合、一人の参加者の発話が一つのカテゴリーだけでなく他のカテゴリーにも及んでいることがあげられる。

6. 結果と考察

本セクションは、研究調査事項にしたがわず、東と西の比較をし、それから臨界期の有無を分析していく。なお、以下のそれぞれのカテゴリーに分類された実際の発話例は、表1を参照されたい。

6-1 関東と西日本での『身内を語る』際の類似点と相違点

まず、観測度数を基にして統計的にみても差異がないと思われる項目から見ておく。表2からもわかるが、関東でも西日本でも『聞き手に対しての発言』では希望や前向きな意見を述べるということがわかった(東13/13 & 西14/20)。この他にも『家族としての発言』で社交辞令を使ったり(東3/4 & 西2/4)、『話し手の気持ちを述べる』時に、惚気たりする(東4/5 & 西5/5)傾向は関東にも西日本にもあるようだ。

次に相違点だが、統計的にも異なると思われる観測度数に焦点を当てておく。まず『褒める』という項目を見ると関東では『外見』(8/26)や『人柄』(10/26)を褒めるのに、西日本では『能力』(15/23)を褒める傾向にあるようだ(表2)。次に『身内に代わっての代弁』を見ると関東では社交辞令的な発話が多い(18/25)が、西日本では事実に基づく代弁(14/29)、つまり身内が言ったことをそのまま伝えるという形式が多いようだ。これらの他に顕著な違いとしては、『代弁(人物紹介)』『聞き手に対しての発言(感謝)』そして『話し手による謙遜(希望発言)』というカテゴリーがある。人物紹介は西日本に多く見られる方略(東1/25 & 西5/29)のようだ。また、感謝(6/20)や希望発言による謙譲表現(6/6)は、西日本のみに見られ、関東ではこれらのサブ・カテゴリーに入る発話はなかった。

表 2 自己の家族を語る時に使われる方略

	関東	西日本	重要な観察***
その場にはいない身内をほめる	26	23	
外見	6+[2]*	2	RQ1D:RQ2B
人柄	10	4	RQ1D
能力	3+(3)**	15	RQ1D:RQ2A
組み合わせ	2	2	
その場にはいない身内に代わって話す（身内のために）	25	29	
社交辞令	16+[2]	9	RQ1D:RQ2B
代弁（内意識）	3+(3)	14	RQ1D: RQ2A
人物紹介	0+(1)	5	RQ1D: RQ2A
聞き手に対しての発言	13	20	
希望・前向きな意見	12+[1]	14	RQ1S
感謝	0	6	RQ1D
家族としての発言	4	4	
社交辞令	2+[1]	2	RQ1S
意志伝達	1	2	
話し手の気持ちを述べる	5	5	
のろけ	3+[1]	5	RQ1S
やきもち	1	0	
その場にはいない身内のことを謙遜する	4	5	
前向きな謙遜	2	0	
否定的な謙遜	1	2	
どちらとも言えない謙遜	1	3	
話し手による謙遜（希望発言）	0	6	
希望発言による謙遜表現	0	6	RQ1D
	77	91	

* [] 思春期を迎える前に関東に移り住んだ人

** () 思春期を迎えた後に関東に移り住んだ人

*** RQ1D (Research Question 1 Differences) ...研究調査事項 1 相違点

RQ1S (Research Question 1 Similarities) ...研究調査事項 1 類似点

RQ2B (Research Question 2 Before) ...研究調査事項 2 思春期を迎える前の移住

RQ2A (Research Question 2 After) ...研究調査事項 2 思春期を迎えた後の移住

6-2 小学校に入学する前の関東への移住

表 2 より、小学校に入学する前、つまり思春期を迎える前に関東に移住した人たちは、『褒める(外見)2/7』『代弁(社交辞令)2/7』『聞き手に対しての発言(希望・前向きな意見)1/7』『家族としての発言(社交辞令)1/7』そして『話し手の気持ち(のろけ)1/7』を使うようだ。すでに述べた東と西の相違点(6-1 の結果を参照)からもわかるが、最初の 2 つのカテゴリーである『褒める(外見)』と『代弁(社交辞令)』は、いずれも関東に多く見られる発話のようだ。つまり、小学校へあがる前に、関東に移住したこの 4 人の西日本生まれの話者たちは関東の発話方略を身につけているようだといえそうだ。そして、『聞き手に対しての発言(希望・前向きな意見)』『家族としての発言(社交辞令)』それから『話し手の気持ち(のろけ)』に関しては、東でも西でも使われる方略なので、これらの結果だけからは、年齢の及ぼす影響に関してはなんともいえない。次に、小学校を卒業してから、関東に移住した人たちについて見てみる。

6-3 小学校を卒業してからの関東への移住

表 2 より、小学校を卒業してから、つまり思春期を迎えた後に関東に移住した人たちは、『褒める(能力)3/7』『代弁(代弁：内意識)3/7』『代弁(人物紹介)1/7』を使うようだ。興味深いことに、これらの発話はいずれも西日本に多く見られる発話のようだ(6-1 の結果を参照)。つまり、思春期を迎えた後に関東に移住した人たちは、関東に移住してから最低でも 6 年はたっているのにもかかわらず、思春期までに、つまり生理学的に見る臨界期が終わるまでに習得したであろう西日本でよく使われる発話方略を使う傾向があるらしい。従って、これらの結果から、語用論的能力も、臨界期と言われる思春期を迎える前の母語習得・発達の過程で養われる傾向があるのではないかと考えられる。もちろん、各人の生活環境など(家庭ではどの言葉を使っているか、生活を共にする家族の出身地はどこか等々)にも左右されるし、本研究では間接的な証拠しか得られなかったので、一概にここでの結果がすべてというわけではないが、本研究の結果にも一理あるということだ。

7. おわりに

以上、見てきたように、まず関東と西日本では『身内を語る時』の方略は、類似点より相違点のほうが多いようだ。『褒める』ひとつをとっても褒める内容が異なる。関東は『外見』や『人柄』を褒めるが西日本では『能力』を褒める傾向にあるというように。また、『人物紹介』や『感謝』や『希望発言による謙譲表現』は関東では殆ど使われないが、西日本でよく使われる方略のようだ。

更に、年齢が語用論習得に与える影響に関して考えると、小学校を卒業してからの関東へ移住した人たちが、未だに西日本でよく使われる方略を使っていることを考えると、語用論能力も思春期を迎えるまでに第一言語習得・発達とともに身につけ、思春期を過ぎてからの無意識的な努力なくしての習得は困難なのかも知れない。つまり、語用論能力習得にも、生理学的な臨界期が存在する可能性があるわけだ。

今後の課題として、研究参加者（小学校に入学する前や小学校を卒業してから関東に引っ越してきた人たち）を増やしていくこと、『身内を語るとき』だけでなく様々な発話行為での比較をすること、西日本を近畿、四国、山陰と分けて考えること、そして、インタビューをしてデータを確固たるものにすること、などが挙げられる。また、第二言語習得における語用論習得の臨界期に関する研究も進めていきたい。

注

- (1) 本研究は、筆者が聖学院大学（非）をとおして採択され(平成 19 年 4 月~平成 21 年 3 月)、研究代表者を務める科学研究費補助金(基盤研究:19520504)によるものである。研究課題は『第一言語・第二言語(外国語)の社会語用論的言語能力の習得における臨界期』で、広島大学教育学部大学院の深沢清治氏を研究分担者とする。
- (2) ワーデンブルグ症候群とは、遺伝子変異によって発症する遺伝性疾患でその一つの兆候として難聴が挙げられる(富田, 2006)。
- (3) 本稿では便宜上、近畿や中国、四国などを含めた地方を西日本と呼ぶ。Palter & Slotsve (1995)によれば、広島や岡山などの西日本の言葉や言い回しは近畿地方のそれらと共通点が多いという。

参考文献

- Basser, L (1962). Hemiplegia of early onset and the faculty of speech with special reference to the effects of hemispherectomy. *Brain*,85,427-460.
- Birdsong, D. (2005). Interpreting age effects in second language acquisition. In J. Kroll, & A. de Groot (Eds.), *Handbook of bilingualism, psycholinguistic perspectives*, (pp. 109-127). Oxford: Oxford University Press.
- Cerella, J.(1990). Aging and information-processing rate. In J.E. Birren & K.W. Scgaie (Eds.), *Handbook of the psychology of aging* (3rd ed., pp. 201-221). San Diego: Academic Press.
- Chomsky. N. (1959). Review of skinner 1957. *Language*,35,26-58.
- Colombo, J. (1982). The critical period concept. Research methodology, and theoretical concerns. *Psychological Bulletin* 91, 260-275.
- Curtiss, S. (1977). *Genie. A psycholinguistic study of a modern-day "wild child."* New York: Academic Press.
- Davies, R & Ikeno, O. (2002). *The Japanese Mind*. Boston: Tuttle Publishing.
- Ervin-Tripp, S. and Gordon. D. (1986). The development of request. In R. L. Schiefelbusch (Ed.), *Language competence: Assessment and intervention* (pp. 61-95). London: Taylor & Francis.
- Gordon, D., Budwig, N., Strage, A., and Carrell, P. (1980). *Children's requests to unfamiliar adults: Form, social function, age variation*. Fifth annual Boston

- university conference on language development, Bston. (ERIC document reproduction service No. ED205-053)
- Grimshaw, G., Adelstein, A., Bryden, M.P. & MacKinnon, G.E. (1998). First language acquisition in adolescence: evidence for a critical period for verbal language. *Brain and Language*, 63, 237-255.
- Hyltenstam, K., & Abrahamsson, N. (2003). Maturational constraints in SLA. In C. Doughty, & M. Long (Eds.), *The handbook of second language acquisition*, (pp. 539-588). Oxford: Blackwell.
- Kawate-Mierzejewska, M. (2002). Refusal sequences in conversational discourse (UMI Number 3057084). *UMI Dissertation Services*
- Kawate-Mierzejewska, M. (2004). *The critical period in acquiring Japanese pitch accent*. Paper presented at the 27th annual conference of American association of applied linguistics, Portland, Oregon.
- Kawate-Mierzejewska, M. (2008). Goyooron to Rinkaiki (1):kenkyuuchosa-hoohoo no mosaku (Pragmatics and the critical period (1): The ideal way to examine the relationship between the pragmatics development and the critical period. *The International Conference on Japanese Language Teaching*, 20, 86-100. Martonvásár, Hungary.
- Lenneberg, E. (1967). *Biological foundations of language*. New York: Wiley & Sons.
- Liebling, C. (1988). Means to an end: Children's knowledge of directives during the elementary school years. *Discourse Process* 11, 77-99.
- Lindenberger, U., Scherer, H., & Baltes, P.B. (2001). The strong connection between sensory and cognitive performance in old age: Not due to sensory acuity reductions operating during cognitive assessment. *Psychology and Aging*, 16, 196-205.
- Madden, D.J., Whiting, W.L., Provenzale, J.M., & Huettel, S.A. (2004). Age-related changes in neural activity during visual target detection measured by fMRI. *Cerebral Cortex*, 14, 143-155.
- Mayberry, R.L., & Eichen, E.B. (1991). The long-lasting advantage of learning sign language in childhood: Another look at the critical period for language acquisition. *Journal of Memory and Language*, 30, 486-512.
- Montrul, S.A. (2008). *Incomplete acquisition in bilingualism: Re-examining the age factor*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Newport, E. L. (1990). Maturational constraints on language learning. *Cognitive Science*, 14, 11-28.
- Nishihara, S. (1994). Japanese correspondence course for the JET participants 1994-1995: Cross-cultural pragmatics and the Japanese language. Tokyo: CLAIR.

- Palter, D.C., & Slotsve, H.K. (1995). *Colloquial Kansai Japanese: The dialects and culture of the Kansai region*. Tokyo: Tuttle Publishing.
- Penfield, W., & Roberts, L. (1959). *Speech and brain mechanisms*. New York: Atheneum Press.
- Pinker, S. (1994). *The language instinct*. London: Penguin Books.
- Raz, N., Briggs, S. D., Marks, W., & Acker, J.D. (1999). Age-related deficits in generation and manipulation of mental images: II. The role of dorsolateral prefrontal cortex. *Psychology and Aging, 14*, 436-444.
- Raz, N., Lindenberger, U., Borrigue, K.M., Kennedy, K.M., Head, D., Williamson, A., et al. (2005). Regional brain changes in aging healthy adults: General trends, individual differences and modifiers. *Cerebral Cortex, 15*, 1676-1689.
- Sakamoto, N. & Sakamoto, S. (2004). *Polite Fictions in Collision: Why Japanese and Americans seem rude to each other*. Tokyo: Kinseido.
- Salthouse, T.A. (1991). *Theoretical perspectives on cognitive aging*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Salthouse, T.A., Hancock, H.E., Mein, E.J., & Hambrick, D.Z. (1996). Interrelations of age, visual acuity, and cognitive functioning. *Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences, 51*, 317-330.
- Schaie, K.W. (1989). Perceptual speed in adulthood: Cross-sectional and longitudinal studies. *Psychology and Aging, 4*, 443-453.
- Tisserand, D.J., Bosma, H., Van Boxtel, M.P., & Jolles, J. (2001). Head size and cognitive ability in nondemented older adults are related. *Neurology, 56*, 969-971.
- Walters, J. (1981). Variation in the requesting behavior of bilingual children. *International journal of sociology of language 27*, 77-92.
- 富田靖(2006)「色素異常症の遺伝子診断」『医学の焦点：ラジオ Nikkei 2006年1月16日21時15分～21時30分』ミノファージェン製薬
<http://medical.radionikkei.jp/igakushoten/final/pdf/060116.pdf>
 Retrieved in September, 2007.

参考文献 A

下のそれぞれの状況で、なんといいいますか。空白を完成させましょう。

1. 友人を食事に招待するとき

あなた：『先月結婚したばかりなんだけど、金曜日、うちで食事しない？』

友人：『それは、おめでとう。よろこんで。奥[又はご主人]さまにお会いするのがたのしみです。』

あなた：『(_____)
 _____ 』

状況 2 から 5 まで、更に英語版は本研究では分析されなかったもので、以下、割愛する。

参考文献 B

基本的な背景情報

名前 Your name(任意)

e-メール e-mail (任意)

出身 (Where are you from?)

大学と専攻(Your university? & What is your major?)

英語学習暦と学習機関 (How many years/months have you studied English? What institution?)

英語のレベル(自己評価) (self-estimated your English proficiency level)

参考文献 C

同意書

現在、『第一言語・第二言語(外国語)の社会語用論的言語能力の習得における臨界期』という課題で、実社会における言葉の使い方(語用論)と状況にあった適切な言語使用の習得、年齢が語用論習得に与える影響に関する研究をしています。今回は東と西日本の言葉の使い方の違いを探り、年齢が語用論習得に与える影響を考えてみることになりました。皆さんからいただいた貴重なご意見・ご回答は、このプロジェクトのために匿名にて使わせていただきたいと思います。以上のような趣旨にご賛同いただけたら以下に署名をいただければ幸いです。ご協力ありがとうございます。

「私、_____は、貴プロジェクトのために私の回答・意見を使うことを許可します」

日付_____

署名_____